

# かささぎ通信 第141号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 11月 8日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年10月の「森三郎の作品を読む会」では、

「飴の鳥」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)と

「ハーモニカ」(『赤い鳥』1933年9月号)を読みました。

「飴の鳥」は天神様の縁日で売られる、飴売りのじいさんが作る飴細工の話です。出来上がったばかりの飴細工のうぐいすは、飾り台の棧の穴に差し込まれている飴細工たちに自慢話をします。ある朝、天神様がなめていた砂糖をまぶした梅干しの種をふつと吐き出すと、芽が出て木になり金平糖の花を咲かせました。その花をしたって飛んできたのが、ご先祖の飴細工のうぐいすです。時平公のために筑紫に流された天神様は別れてきた梅とうぐいすを思いだして「東風ふかば にほひおこせよ ほうほけきよ 宿はととはば いかたへん」と詠みました。菅原道真の「東風ふかばにほひおこせよ梅の花 主なしとて春を忘るな」と、紀内侍(貫之の娘)の歌とされる「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へん」を合わせたものです。飴細工のうぐいすが金平糖の梅の花をくわえて筑紫まで飛んできたので、天神様は二人をなめないばかりに喜んだと、作者の言葉遊びは続きます。さらに、筑紫の天神様のお社の桜と松の木を登場させて「梅はとび桜は枯るる世の中になにとて松は薪になるらん(なにとて松のつれなかるらん)」と『菅原伝授手習鏡』の三つ子の梅丸・松丸・桜丸へと連想を広げています。実は「飴の鳥」は飴売りの爺さんの歌で始まりましたが、これも『菅原伝授手習鏡』の飴売りの口上ですから、作者の構想は初めからそこにあつたわけです。飴細工の様子は大変詳しく書かれていて、作者が子どもの頃に実際に見ていたのだろうと分かります。会の当日の参加者の中からも熱田神宮で目にした経験を語る声がありました。

ところで先回「かささぎ通信」第140号で『雪こんこんお寺の柿の木』所収の「父」を取り上げましたが、亡くなった妻が残してくれた梅・松・桜の三本の木を父は我が子として大切に育てていました。

登場する梅・松・桜の取り合わせといい、帝の所望で美しい桜の木が内裏の庭に移される流れといい、「父」と「飴の鳥」の構想は作者の頭の中で関連するものと位置付けられていたような気がします。「父」には悲哀が残りますが、「飴の鳥」では三郎さん得意の言葉遊びを使つて、大道芸の飴細工売りを愉快に描いたのではないのでしょうか。

『赤い鳥』の「ハーモニカ」は主人公のぼくと仲良しの信ちゃんがいつも通り一緒に学校から帰る道すがらの話です。ちよつとしたことから二人は互いに相手をからかって怒ったり、黙りこんだりしながら歩いて行きました。途中、カバンからころがり出たのか信ちゃんのハーモニカが落ちていたのに気づいたぼくは後でからかう種にしようと、それを自分のカバンにしまいました。渡しそびれた信ちゃんのハーモニカは、落したのを拾ったからと言って信ちゃんの妹に託しました。けんかをしたわけではないのに、言い合いを重ねて仲直りをするきっかけを逃してしまったぼくの気持ちがよく描かれています。

その日の夕方、お婆さんの薬をもらいに行つた帰り道、信ちゃんの家の前を通ると、信ちゃんがハーモニカで吹く「からたちの花」が聞こえてきます。ぼくはハーモニカが信ちゃんの手に戻つたことを喜ぶように、ハーモニカに合わせて大声で歌いました。下校途中ぼくが高音の「からたちの花」を歌うと信ちゃんがからかったのですが、信ちゃんもやっぱりぼくと気まづくなつたことを後悔していただろう。暗闇の中で響き合うハーモニカと歌声は「からたちの花」の「みんなみんなやさしかったよ」という詩の言葉とともに二人の少年の心の通い合いを感じさせる終わり方で、読む者をほっとさせてくれました。

『赤い鳥』に白秋の「からたちの花」が載つたのは、三郎が高等科二年の時です。山田耕筰の曲が付いたのは翌年のことで、卒業後です。

〈次回予定〉2024年12月13日(金)午後一時半~三時半

「鼓大名」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)

「ステッキえんぴつ」(『赤い鳥』1933.10)